

揺れる時間と空間

Cranford と *Cousin Phillis* にみる中間的領域

川 村 恵 子

はじめに

19世紀ヴィクトリア朝英国に流れた時間とそこに存在した空間は、2つの巨大ネットワーク出現によって大きく変化した。「鉄道」と「郵便」である。鉄道の導入は人々の移動時間と距離を決定的に変化させ、ブルジョワの特権であった手紙は1840年のPenny Post改革によって、一般の人々の生活に急速に浸透した。この変化が、移動・通信にかかわる時間や距離の短縮以上の大きな意味を有したことは注目に値する。その意味を読み解く鍵を、1839年 *Quarterly Review* に掲載された以下の記事に探してみたい。

The Indian Ocean is not only infinitely smaller than it used to be, but the Indian mail, under the guidance of steam, has been granted almost a miraculous passage through the waters of the Red Sea. The Mediterranean, which is now only a week from us, has before our eyes shrunk into a lake. (Head 23)

この記事から浮かび上がるのは、鉄道や郵便の普及が当時の人々の「脳内地図」と「時間感覚」を根底から変化させていくさまである。実際 Wolfgang Schivelbusch は、19世紀の変革が既存の時空間意識を崩壊させた、と論じる。そしてその崩壊を、当時の人々が“Annihilation of time and space”——「時空間の消滅」——という語を用いて明確に認識していた、と主張している (Schivelbusch 10)。

こうして時空間意識が揺れ続ける時代に生きた作家 Elizabeth Gaskell は、当然その変化に無意識ではなかった。それを裏付けるかのように、*Cranford*

(1853)と *Cousin Phillis* (1863) という2作品には、「郵便」や「鉄道」の普及とともに変わりゆくコミュニティの姿がはっきりと刻まれている。*Cranford* には、*Captain Brown* のエピソードから明らかなように、旧時代的で静かな人々の生活をおびやかす脅威としての鉄道が見え隠れする。また *Mary Smith* が *Miss Matty* と古い手紙を処分したり、インドにいる *Aga Jenkyns* へと手紙を書いたりするように、郵便制度の変化と発展も前景化される。*Cousin Phillis* に目を転じれば、語り手 *Paul* は鉄道網の整備に携わる技術者であり、物語の展開と歩をあわせるように *Eltham*—*Hornby* 間に鉄道が敷かれていく。さらに作品後半部では、*Penny Post* の改革に関して、明確な言及が見られる (“*The Penny-post reform, as people call it, had come into operation a short time before; but the never-ending stream of notes and letters which seem now to flow in upon most households had not yet begun its course; at least in those remote parts*” [*Cousin Phillis* (以下 *CP*) 300])。ここから、*Penny Post* 改革による手紙の流れが帝国の地図を少しずつ塗り替えていくことへの、*Gaskell* の明らかな意識を読みとくことができるだろう。

19世紀中盤の時空間意識が、「鉄道」や「郵便」の導入によって劇的に変化したのだとしたら、そして *Cranford* と *Cousin Phillis* がその時代背景に深く根ざしているのだとしたら、両作品はその劇的な時空間意識の変化をどのように描き出しているのだろうか。そしてその表象には、*Gaskell* や当時の人々が時空間の揺れに対して抱いた意識がどのように反映されているのだろうか。本稿ではこの問題意識をもとに、*Cranford* と *Cousin Phillis* という2つの作品をひもといていくことにする。

Ⅰ 「中間的」時空間の出現

実際の作品分析に入る前に、19世紀「時空間意識の変化」に関していくつか確認しておきたい。まず重要なのは、この時代の変化が「古いものを新しいものによって置き換える」という単純な構図ではなく、いくつかの特徴的な側面を有することである。最も顕著な特徴の1つに、「時空間と人々の身体意識との乖離」があげられる。19世紀以前の時空間は、人の歩行や馬が走る速さ、天候や旅する人の体調など、有機的で身体的な要素によって計られていた。それに対し新時

代のトポスである鉄道や郵便は、有機的で人的な要素と切り離された「無機的な」時空間を導入したとあってよい。たとえば鉄道に関しては、Thomas de Quincey の *The English Mail Coach* (1849) がこの「切り離し」をはっきりと提示する。旧時代的な旅が、馬の疲労や汗、ゆっくりとすぎていく車窓の景色などによって、空間の移動や時間の経過を旅人の身体に刻むものだったのに対し、新時代的な鉄道の旅は旅人の身体と時空間座標とのつながりを断ち切ってしまった、と De Quincey は嘆いている (De Quincey 283-84)。また鉄道から郵便へと目を転じて、同じように人々の身体感覚から乖離していく新たな時空間座標の出現を指摘できる。James How の提唱する Epistolary Space という概念を参考に考えてみよう。

A Post Office, as its primary function, sets up and then advertises the existence of impersonal spaces, which are continually there, and into which you can send your letters once they are written. [...] Letters thus, from the point of view of the sender, disappear when sent into an established system, which is awash with other letters, and come out, after a delay, on the other side. [...] for those aristocrats and gentry used to the cocooning feeling provided by the private carriage of letters by trusted and known carriers, the Post Office generated a new and perhaps uncomfortable feeling. (How 4)

ここで How が主張するのは、郵便網がもたらした新しい時空間である。従来の手紙は、信頼する召使や知り合いの手によって運ばれ、その伝達経路が書き手、読み手双方にとって近いものであった。しかし、鉄道による大量かつ迅速な輸送と顔の見えない巨大な郵便網による日々の集配とが始まると、書き手と読み手の間には時間的・空間的に特定の難しい独自の領域が展開するようになる。すなわち書き手と読み手の間に展開した時空間は、巨大郵便システムの導入によって人々の身体から一気に遠ざけられ、不可知な領域へとその様相を変化させたことがうかがえるのである。

ここまでの考察をもとに、19世紀的な新しい時空間意識を考える上でのキーワードとして「中間的」時空間、という語を設定したい。鉄道網の拡充は、駅と

駅との間の空間や行程、すなわちその「中間的」時空間を人々の身体意識から切り離し、手でふれたり目で見たりすることのできない領域へと変化させた。また郵便網は、書き手と読み手の間の「中間的」時空間において、書き手読み手双方の意識や身体と切り離された無機的な領域を創出した。さらに、郵便がその輸送形態として鉄道に依存したことを考え合わせれば、複数の「中間的」時空間領域が重なりあいながら影響しあうというダイナミズムも指摘できるだろう。したがって19世紀に起こった時空間意識の変化が、単に新しいテクノロジーによる発展と広がりのみを意味するのではないことは明らかである。新しい時代の時空間はその裏側に、手に届かず目に見えず、既存の枠組みで把握することの難しい多くの「中間的」時空間領域を、ねじれ交錯する形で抱え持ったものだったからである。この点をふまえ、次の2つの節で *Cranford* と *Cousin Phillis* を順に取り上げ、それぞれの作品内で「中間的」時空間がどのように展開しているのか、それが登場人物の経験にいかにか影響しているのかを分析していく。

II *Cranford* における「中間的」時空間

はじめに、*Cranford* の物語を駆動する重要なエピソードに注目してみたい。一見して静かで動きの少ないこの作品は、失踪していた Peter の帰還によって大団円へと導かれる。興味深いのは、彼の失踪と帰還が「郵便」や「手紙」と密接なかかわりをもち、それが「中間的」時空間の存在とその脅威とを浮き彫りにする点である。まずは失踪のきっかけから考えていこう。長年 Miss Jenkyns や Miss Matty と知り合いであったはずの Mary Smith だが、彼女がはじめて Peter の存在を知るのは Miss Jenkyns の死後 Miss Matty とともに古い手紙の処分をはじめ第5章においてである。彼が両親にあてた手紙をひもとくうち、Mary Smith はその手紙の中にある力強い「現在」——“vivid sense of the present time, which seemed so strong and full” (*Cranford* [以下 C] 85) ——にからめとられはじめる。こうして彼女の時間、したがって *Cranford* の語りの現在は、個々の手紙や郵便の中に閉じ込められた当時の時空間と交じり合い、過去と現在とをねじれさせていく。

Mary Smith の時間軸が揺れ始めると同時に、Miss Matty は Peter の思い出話をはじめ。ここで重要なのは、Peter の失踪を決定づけたものが郵便の誤配や

遅配によって生み出された「中間的」時空間にある点である。たとえば、家を出て **Liverpool** にいきついた **Peter** は船でイギリスを離れる決心をする。その船の船長が両親にあてて送った手紙はなんらかの郵便トラブルによってとめおかれ、両親のもとに遅れて届く。急いで **Liverpool** に向かおうとする夫妻だが、またもや「郵便」のために遅れを余儀なくされる。郵便馬車がレースに出ているにもかかわらず、結局 **Peter** に会うことができないのである。また **Jenkyns** 夫人がその後 **Peter** に送った手紙は、あて先の間違いから未開封で牧師館へと送り返され、そのまま放置される。つまり、**Peter** が **Cranford** という街から、そして **Cranford** という作品世界から失われた理由の多くは、書き手と読み手の「中間的」領域で起こる郵便事象 — 誤配・遅配・郵便馬車の遅れ — によって作り出される。言い換えれば、**Peter** は郵便が作り出したその「中間的」時空間領域に吸い込まれるようにして **Cranford** の街とテキスト世界から姿を消した、としてもよいだろう。

さらに興味深いのは、**Peter** のエピソードが **Mary Smith** の語りの中で **Cranford** の作品世界によみがえるとき、そこに展開する時空間が複雑にねじれることである。牧師館に眠っていた **Jenkyns** 夫人の手紙を開封すると、**Mary Smith** のまわりには手紙の中の時間が不思議な現前感覚とともに呼び起こされる。そこに展開するのは単純な過去でも現在でもなく、過去にその手紙がきちんと配達されていたらこうであったかもしれない、またはこうでなかったかもしれない「現在」や「未来」である。さらに、彼女の語りはもうひとつのねじれを明らかにする。

That spring day was the last time he ever saw his mother's face. The writer of the letter – the last – the only person who had ever seen what was written in it, was dead long ago – and I, a stranger, not born at the time when this occurrence took place, was the one to open it. (C 100)

手紙が書かれた「現在」には生まれてさえいなかった **Mary Smith** が、手紙の開封者となりその不思議な「現在」を追体験することで、時空間のねじれはさらに重層的になる。ここから、**Peter** の失踪とテキストへの回帰に「中間的」時空間がいかに深くかかわっているかを見て取ることができるだろう。郵便が展開する

「中間的」時空間にからめとられて *Cranford* の街から姿を消した *Peter* は、*Mary Smith* の語りの中で同じように「中間的」な時空間が再構築されてはじめて、*Cranford* のテキスト世界に回帰することができるからである。

したがって、*Peter* が最終的に *Cranford* の街へ帰ってくるきっかけが同じ郵便ネットワークと、そこに展開する「中間的」時空間に結びつけられることは偶然ではない。彼が *Cranford* の街へと戻るきっかけは、*Mary Smith* の手紙によって与えられる。*Miss Matty* の破産を知った *Mary Smith* は、その窮状を救おうと *Aga Jenkyns* に手紙を書く。

I dropped it in the post on my way home; and then for a minute I stood looking at the wooden pane with the gaping slit which divided me from the letter, but a moment ago in my hand. It was gone from me like life – never to be recalled. (*C* 182-83)

自らの手から郵便ポストへと投函した瞬間、*Mary Smith* は手紙の時空間が自らの住む世界とは完全に切り離された、と感じている。手紙自体は、明らかに彼女のすぐ近くに実体として存在しているはずであるのに、郵便システムに飲み込まれた瞬間、空間的にも時間的にもはや書き手のコントロールを離れた「中間的」時空間領域に吸い込まれていることがここから読み取れる。ここまでの考察から明らかのように、*Peter* の失踪から帰還という *Cranford* における最も大きなエピソードは、郵便が生み出す「中間的」時空間と密接にからみあいながら展開する。その時空間は、人々のコントロールを離れた領域に存在し、登場人物のまわりの過去と現在をゆがませ、そのひずみの中に彼らの存在を飲み込み、その運命を恣意的に支配するという脅威をちらつかせるのである。

III *Cousin Phillis* における「中間的」時空間

続いて *Cousin Phillis* の考察に移りたい。*Cousin Phillis* の物語を駆動する大きなエピソードは、カナダへ旅立った *Holdsworth* が心変わりして他の女性と結婚すること、そしてそれを知った *Phillis* が病に倒れること、である。このドラマに沿う形で、*Cranford* で見たと同じ特殊な時空間が展開することは興味深い。

まず、このエピソードの伏線から確認しておこう。恋に悩む *Phyllis* の姿にあわれをさそわれた語り手 *Paul* は、*Holdsworth* の気持ちを彼女にもらしてしまう。その直後、彼のもとへカナダから1通目の手紙が届く。手紙は内容的には何の問題もないものだが、*Paul* はなぜか嫌な予感を抱く。この予感が的中するのは、2通目の手紙が届きそこに展開する時空間がゆがんでねじれるときである。

It seemed to me as if I had read its contents before, and knew exactly what he had got to say. I knew he was going to be married to Lucille Ventadour; nay, that he was married; for this was the 5th of July, and he wrote word that his marriage was fixed to take place on the 29th of June. I knew all the reasons he gave, all the raptures he went into I held the letter loosely in my hands, and looked into vacancy. (*CP* 292-93)

Paul はここで、手紙を受け取る前にその内容をすべて熟知していたかのような錯覚におそわれている。つまり、彼をとりまく過去と現在がねじれているのである。そのねじれを生んだ手紙の内部には、さらにもうひとつの時空のねじれが存在する。書き手 *Holdsworth* にとっての近未来であった6月29日の結婚は、読み手 *Paul* がその手紙を受け取った7月5日の段階ですでに過去のものとなっている。さらに、この結婚を *Paul* が1通目の手紙の時点ですでに悪い予感として予期していたとすれば、この過去と未来の転倒はよりいっそう重層的な色合いを帯びる。そこには、書き手にとっても読み手にとっても、そして読者にとっても、単一化することのできない時間と空間の軸の交錯が展開し、その背後には郵便の作り出す「中間的」時空間が垣間見えるのである。

すなわち、1通目と2通目の間に空く間隔・時間、書き手の現在と読み手の現在との間に開く時間・空間 — 郵便というシステムによってこれらはねじれ、複雑化し、*Holdsworth* の結婚という単純な事実は何回も再生しなおされながら、「中間的」時空間の中をさまようことになる。そしてそれゆえに、*Phyllis* の失恋やそれを見る *Paul* の心の葛藤はいっそう耐え難いものとなり、小説全体に暗い影を落とす。

ここまでの議論では、*Cranford*, *Cousin Phyllis* という2つの作品において、

主に郵便表象に注目し、それがいかに語りの時空をゆがませ中間的領域を創出しているかを分析してきた。その分析から、「中間的」領域に吸い込まれる、もしくははからめとられる登場人物達が、作品世界の中で確固たる足場を失い、過去とも現在とも判断のつかない「中間的」時空間に翻弄されていることがわかる。この分析を踏まえ次の節では、作品の語りの構造全体と「中間的」時空間とがいかに関連しあっているか、そしてそこに今度は鉄道という要素がいかに関係してくるか、について見ていくこととする。

IV 語り手の語る場所：不安定な「中間的」時空間

郵便や鉄道が生み出す「中間的」時空間の脅威が、登場人物の経験のみならず、両作品の語り手、もしくは語りの構造全体にも影響を及ぼしていることは注目し値する。以下で順に、2つの作品の語り手とその語り手が「中間的」時空間にどのように影響されているか、見ていくこととしよう。*Cranford* を語る *Mary Smith* は、語りの内容や付き合う人々などすべての拠点が *Cranford* の街にあるにもかかわらず、そこと鉄道で結ばれた *Drumble* という街に住居を定めている。彼女は *Drumble* へ帰るためたびたび *Cranford* を留守にし、“I had vibrated all my life between *Drumble* and *Cranford*” (C 211) という言葉で、2つの場所の間を揺れ続けたみずからの微妙な立場を明らかにする。この点に関して *Hilary Schor* は、*Cranford* 的価値観にも *Drumble* 的資本主義にも回収されえない *Mary Smith* の不安定なアイデンティティを示すものであると解釈する (Schor 113-15)。この分析と本稿の議論とをあわせて考えれば、興味深い関連に気がつくだろう。語り手の不安定なアイデンティティが、*Cranford* と *Drumble* という2つの鉄道駅間の「中間的」時空間をめぐって展開している、という事実である。すなわち語り手の立場の不安定さは、彼女がたびたび往来する2つの鉄道駅間の「中間的」時空間領域と分ちがたく結びついている、と考えられる。

一方、*Cousin Phillis* の語りの構造に目を向けても、同じく「中間的」時空間に立脚する不安定さを見て取れる。語りがはじまるのは *Eltham* と *Hornby* という2つの鉄道駅間に線が敷かれはじめるのと時を同じくしており、したがって語りの空間はその駅と駅との間、「中間的」な時空間領域において展開する。さらに興味深いことに、4部構成をとる作品の展開は、線路を敷いていく進捗状況

と歩をあわせるようにして進む。Eltham から Hornby へと鉄道が敷かれていくにしたがって、前半の 2 部は Eltham に拠点をおいて語られ、後半の 2 部は Hornby に拠点をおいて語られる。その駅と駅の間には存在する時空間が、鉄道工事の進展とともに少しずつ人々のコントロールの及ばない「中間的」領域へと変化していくと、平和に暮らしていた Hope Farm のバランスは崩れていく。そして線路の完成によって、その時空間が完全に旧時代的枠組とは切り離された「中間的」領域へと変容するや、Phillis に決定的打撃を与える Holdsworth からの手紙が届き、語りのスペースが閉じられるのである。すなわち *Cousin Phillis* という作品は、ある領域が旧時代的な時空間座標を奪われ、駅と駅の中の「中間的領域」へと変容されていくのと並行して破綻へと導かれていく。そして最終的に、旧時代的領域が新時代的な「中間的」時空間座標の中に消滅すると同時に、語りの時空間も消滅するのである。

おわりに

19 世紀、郵便と鉄道がもたらした大きな社会構造の変化によって、新しい時空間領域が次々と出現した。駅と駅の間の時空間、郵便ポストに入れられた瞬間に書き手と読み手の間に口を開ける不可知な領域。当時の人々は、このはかりしれない領域と自分の身体との乖離に、不安を感じざるをえなかっただろう。その時代を生きた Elizabeth Gaskell もまた、その不安から自由ではなかったはずである。事実 *Cranford* と *Cousin Phillis* という 2 つの作品には、時の止まったような静かな世界観とほうらはらに、「中間的」時空間が登場人物に対して掲げる脅威がはっきりと浮かび上がる。そして、登場人物のみならず語り手や語りの構造までもが「中間的」時空間の脅威にさらされていることは、Gaskell の不安について興味深い一面を示唆しているといえるだろう。そこには、19 世紀の揺れ続ける時空間の中で、作品内に安定した「語りの時空間」を創出したいと願った Elizabeth Gaskell の、書き手としての不安と葛藤がうかがえるようである。

Works Cited

De Quincey, Thomas. *The English Mail Coach*. Vol.3 of *The Collected Writings of*

- Thomas de Quincey*. London: A & C. Black, 1897.
- Gaskell, Elizabeth. *Cranford / Cousin Phillis*. London: Penguin, 1986.
- Head, Francis B. "Railroads in Ireland." *Quarterly Review* 63 (1839): 1-60.
- How, James. *Epistolary Spaces: English Letter-writing from the Foundation of the Post Office to Richardson's Clarissa*. Aldershot: Ashgate, 2003.
- Schivelbusch, Wolfgang. *The Railway Journey: the Industrialization and Perception of Time and Space in the 19th century*. Leamington Spa: Berg, 1986.
- Schor, Hilary M. *Scheherazade in the Marketplace: Elizabeth Gaskell and the Victorian Novel*. Oxford: Oxford UP, 1992.

(東京大学大学院博士課程)